

令和7年(2025年)11月17日

保護者の皆さま

豊能町立東ときわ台小学校
校長 張 裕 太 郎

令和7年度(2025年度)全国学力・学習状況調査の結果および今後の取組みについて

向寒の候、保護者の皆さまには、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

平素は、本校教育活動にご理解ご協力をいただき、ありがとうございます。

さて、4月17日(木)に悉皆調査として実施しました6年生の「全国学力・学習状況調査」の結果分析を行いました。本調査は、児童の学力や学習状況を把握・分析し、学校における教育活動の充実や学習状況の改善等に役立てることを目的に、平成19年度より実施されています。本校においては調査人数自体が少ないため、統計の数字だけで「良い・悪い」を判断しづらい面もありますが、課題については、校内で共有し、改善に向けて取組みを進めてまいります。

以下に、今回の結果分析から見えてきた「プラスの面○」「マイナスの面●」および「課題克服に向けての取組み」をまとめましたので、ご家庭でも話題にしていだけますよう、よろしくお願い致します。

なお、豊能町教育委員会による町全体の分析結果は、本町HPにて公表されています。また、全国学力・学習状況調査の問題・調査用紙やその分析結果は、国立教育政策研究所HPで公表されています。それぞれご覧ください。

1. 学力状況調査の結果から

学力状況調査の結果は、算数は府や全国の平均値を上回り、理科は府や全国の平均値とほぼ同じでしたが、国語は府や全国の平均値を下回り、改善が必要な項目もありました。

国語 ○無解答率がほとんどの問題で0%であった。また、多くの児童が「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と答えた。

○これまで課題の見られた漢字については府や全国の平均値と同程度であり、改善が見られた。

●多くの問題で、正答率が府・全国平均を下回っていた。

●一部の記述式の問題については、府・全国平均を大きく下回り、「書くこと」において課題が見られた。また、書く内容の中心を明確にし、内容のまとめりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えることについても、課題が見られた。

●目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけることができることについて、課題が見られた。

「課題克服に向けての取組み」

◎書く内容の中心を明確にし、内容のまとめりで段落をつくる。

問題2ーにおいて、手ぬぐいの使い方の順序に着目してしまい、伝えたいことの中心を明確にして、内容のまとめりごとに分けて書いていると捉えることができなかった児童がいたと考えられる。内容のまとめりで段落をつくるためには、書こうとしている材料の中から、中心に述べたいことを絞ることが重要である。このことによって、中心となる事柄や、それに関わる他の書きたい事柄が明らかになる。指導においては、文章を書く際にまずはそれぞれの児童が「何のためにその文章を書きたいのか」という目的を明確にもつことが大切である。その上で、その目的を達成するには、「何を書きたいのか」を整理し、書く内容の中心を決めることが重要である。児童によっては、書く内容の中心は明確になっているが、内容のまとめりごとに構成できない児童もいると考えられるが、その場合は、内容のまとめりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして文章の構成を考える指導を行う。

◎目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付ける。

問題3三(2)において、納得したことを【資料1】から言葉や文を取り上げて書いているが、【資料2】、【資料3】、【資料4】

から言葉や文を取り上げて書けていない。この中には、「【資料1】を読んで納得したことをまとめる」という目的を意識したものの、【資料1】を読んで納得したことの理由となる情報を【資料2】、【資料3】、【資料4】の中から見付けることができなかった児童がいたと考えられる。目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして情報を見付けるためには、文章の要旨を捉えた上で、図表などが文章のどの部分と結び付くのかを明らかにしながら、必要な情報を取捨選択したり、整理したり、再構成したりすることが重要である。必要な情報は、目的に応じて変わるため、読む目的を明確にすることが大切である。指導において、複数の資料を結び付けて読む学習活動を設定し、それぞれの資料がどのような関係にあるのかを考えながら読むことを行う。その際、それぞれの資料にある、語句や情報を丸や四角で囲んだり、線などでつないだりするなどして、どの部分と結び付くのか視覚的に明らかにしながら読む指導を行うことが効果的であると考えられる。

算数 ○すべての領域で正答率が府・全国平均を上回った。また、多くの問題で正答率が府・全国平均を上回っていた。
○無解答率がほとんどの問題で0%であった。また、多くの児童が「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と答えた。

○これまで課題の見られた「数と計算」や「図形」領域の正答率が、府・全国平均を上回り良好であった。

●記述式の問題について、正答率が府・全国平均を下回り課題が残った。

「課題克服に向けての取組み」

◎多角形の面積の求め方について、基本図形の面積の求め方を基に考察できるようにする。

多角形の面積を求める際に、面積の求め方を知っている図形を見いだして考えることができるようにすることが重要である。指導に当たっては、例えば、問題2(4)のように、方眼上の多角形の面積を求める活動が考えられる。多角形を分割すれば面積を求められるのではないかといった方法の見通しをもつことができるようにすることが大切である。どのような図形に分割したのかを明らかにして、分割した図形の面積を求めるために必要な辺の長さなどを捉え、その図形の面積を求めることができるようにすることが大切である。その上で、多角形の面積の求め方を覚えるとともに、どうしてこのような公式になるのかを考え、言葉を用いて表し説明できるようにすることで、更に身に付けることが大切である。

◎指導方法の工夫改善

これまで同様、算数の各単元に対して十分な習熟をはかる一方で、課題を見つけて筋道を立てて考えた上で、求め方や理由などを適切な言葉で表現する力、結果をもとに考察する力を更につけ、学習したことを文章でまとめる機会を今後も大切に、より多くつくる。また、目的や意図に応じて、理由を明確にししながら、自分の考えをまとめて文章に書き表す指導をしていく。

理科 ○無解答率がほとんどの問題で0%であった。また、多くの児童が「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と答えた。

○A区分(「エネルギー」「粒子」をそれぞれ柱とする領域)で正答率が府・全国平均を上回った。

●一方で、B区分(「生命」「地球」をそれぞれ柱とする領域)は正答率が府・全国平均を下回った。

●記述式の問題については、府・全国平均を大きく下回った。

●身の回りの金属についての知識に関する問題の正答率が府・全国平均を下回り、多くの児童が誤答した。

「課題克服に向けての取組み」

◎観察、実験の結果を基に、問題に正対した自分の考えを表現する

観察や実験の「結果」を基に考察し、「問題に対するまとめ」の理由を適切に表現することができていないと考えられる。結果を基に、自分の考えを表現するためには、結果を整理し、具体的な数値等を基に、より妥当な考えをつくりだし、表現することが重要である。指導に当たっては、結果を基に考察する際に、表やグラフなどに整理する活動を設けることで、結果を比較したり、複数の結果から多面的に考えたりして、自分の考えを表現できるように指導することが大切である。また、根拠となる結果を具体的な数値などを用いて表現することで、より妥当な考えをつくりだすことができるように指導していくことも大切である。児童によっては、自分の予想に沿って都合よく結果を解釈してしまったり、結果を基にしながら考えを表現でき

ていなかったりすることもある。そのため、全体の結果を基により妥当な考えが作りだせるよう、例えばタブレットを活用するなどにより、結果を即時的に共有したり、表からグラフに整理したりして、結果に着目させながら指導する。

◎学習内容の関係付けによる深い理解

電気を通す物と磁石に引き付けられる物に関する知識が身に付いていない児童が多いと考えられる。学習した知識を身の回りで見られる事物・現象と関係付けたり、様々な内容で習得した知識を整理したりして、物質の性質に関する理解を深めることが大切である。指導に当たっては、例えば、磁石に引き付けられる物と引き付けられない物を調べる際に、既習事項「電気の通り道」での実験の結果を振り返りながら、物質の性質に着目して整理する学習活動が考えられる。「磁石の性質」と「電気の通り道」では、鉄、アルミニウム、ガラス、木など、同じ対象物を用いて学習することが多い。それぞれの内容で習得した知識を物ごとに整理し、まとめるなどして、物質の性質について理解を深めるようにする。

2. 学習状況調査の結果から

本校の今年度の学校教育目標は「『なりたい自分を育てる学校』～自律・つながり・挑戦を育てる～」です。児童質問紙から、子どもたちの生活や家庭学習の様子、授業に対する意識の調査結果から見られる特徴に加え、本校の目標と関連の深い項目を中心に取り上げました。これは、保護者・地域の皆さまに、本校の子どもたちの学習の状況をお知らせすることで、本校の教育に更なる関心を高め、地域ぐるみで子どもたちの育ちを支え、今後の充実・発展につなげたいと考えたからです。課題については、校内で共有し、今後も改善に向けて取り組んでまいります。(以下、調査結果を基に本校の分析・考察を述べておりますが、この分析・考察はあくまでも一つの側面です。)

肯定的な意見の多かった項目

○「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」

→すべての児童が肯定的な回答でした。これからも、児童自身の日々の振り返りに加え、児童一人ひとりのよい点や可能性を見つけ、積極的に評価していくことを大切にします。

○「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか」

→小規模校であるからこそ、少人数で学ぶことができる良さの一つが表れた結果であると捉えています。

○「学校に行くのは楽しいと思いますか」

→今後も、全ての児童にとって、学校に行くのが楽しい、と感じられるよう、全教育活動を通じた指導を継続していきます。

○「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」

→すべての児童が「いけない」と判断しており、規範意識の高まりが見られます。府・全国平均と比べても高い傾向が見られます。今後も、全ての児童が、全ての場面で、いじめはどんな理由があっても許されない行為であるという強い認識を持てるよう、全教育活動を通じた指導を継続していきます。

○「将来の夢や目標を持っていますか」

「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか」

→今後も、全ての児童にとって、夢や目標が持て、普段から幸せであることが感じられるよう、全教育活動を通じた指導を継続していきます。

○「人が困っているときに、進んで助けていますか」

「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」

→日頃から、学級や縦割り活動、異学年との取組みなどを行っており、また、家庭・地域を含め、自分の周りの人との関わりを持つこともあり、その中で人のために、地域や社会のために頑張りたいと思っている姿が感じられます。また、そのことを適切に学校や家庭、地域で子どもたちにフィードバックできている結果でもあると考えます。

○「授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切に、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか」

「あなたの学級では、学級生活をより良くするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか」

「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」

→見解の相違を前提としながら、他者対話し学び支え合うなど、教室の仲間とともに学び、活動する意識が高いことがわ

かります。また、これまで重点的に取り組んできた「安心して学べる学習集団形成の充実」が、授業だけでなく学級集団づくりの観点からも、その良さについて肯定的に捉えられているといえます。

○「国語の授業の内容はよくわかりますか」「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つと思いますか」

「算数の勉強は得意ですか」「算数の勉強は好きですか」「算数の授業の内容はよくわかりますか」

「算数の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つと思いますか」

「理科の授業の内容はよくわかりますか」「理科の授業では、観察や実験をよく行っていますか」

→これらを含む教科学習に関する多くの設問で、肯定的な意見が多い結果が見られました。各教科の授業に対して前向きに捉えられているといえます。これまで学習習慣の形成や定着のために行ってきた「家庭学習ウィーク」などの学習意欲を育む取組みを継続して行っている成果の表れだと考えています。

○「5年生までに受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか」

「5年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか」

→これまでも取り組んできた「子どもが主体的に学ぶ授業」を意識した授業づくりの成果が出ていると考えます。今後も、児童が目的をもって主体的に学習できるよう、授業改善に取り組んでいきます

肯定的な意見の少なかった項目

●「自分には、よいところがあると思いますか」

→謙虚さや控えめな面、よいところと考える基準が個人で異なり自己に厳しい判断をしている、などが表す結果と捉えることができる一方で、失敗を恐れる、他人との比較をしてしまう、なども考えられます。否定的な回答をしている児童が一定数いることを受け止め、結果だけでなく、過程を重視する指導を行い、「あきらめずに粘り強く生き抜く力」の育成を図ることが必要であると考えます。

●「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」

→大きく下回るものではありませんが、府・全国平均を下回りました。前述の通り、学校に行くことを楽しいと思っている児童が多い一方で、困りごとや不安がある時に、教員や学校にいる大人にいつでも相談できると回答している児童・生徒の割合が決して高いとは言えない結果から、学校全体として教員と子どものよりよい関係づくりや、子どもに対する相談機能を改めて高めていくことが必要であると考えます。

●「友達関係に満足していますか」

→こちらも前述の通り、学校に行くのが楽しい、と感じられる児童が多い中で、友達関係については高くない結果となりました。少人数であるが故の人間関係の固着化や、狭い人間関係ということも関係していると考えられます。今後も、様々な活動で、様々な人と関わりながらよりよい関係づくりを構築できるよう心がけるとともに、みんなで話し合いながらよりよい生活を考える取組みを積み重ねていきます。

《課題克服に向けての取組み》

◎安心して学べる学習集団形成の更なる充実

今年度本校は「言語能力をはぐくむモデル校」として研究を行っており、国語科を中心に言語活動の充実などの取組みを進めています。文字や言葉で表すときに伝え手として大切にしたいことは「想像力」と「思いやり」です。「相手がどのように受け取るか」「傷つく人はいないか」など、様々なことを想像しながら言葉を選ぶことです。また、1つのことを表すのに何通りもの言葉があることで、日本語という言語の奥深さが象徴されていると考え、より深いコミュニケーションの実現のために言葉の引き出しを増やしていくことも大切です。そうした中で、なおのこと想像力を働かせて相手を意識し、自分の考えの理由・根拠を示すことが必要になってきます。最近増えている「伝わればよくね?」といった考えに危機感を覚えているのは、私だけでないと思います。「伝わればよい」のではなく、「どのように伝わるか」が大切で、ここに相手への思いやりが必要になります。今後も研究を進め、自分の考えを筋道立てて相手に分かるように伝え合うことで学びを深めていきます。そして、相手を大切にしたい言葉を選べる子どもたちを今後も育て、そういったことから互いの信頼関係の醸成など、安心して学べる学習集団形成の更なる充実を図ってまいります。